

研究ノート

日本仏教各宗派による海外布教事情を探る

川口智徳

一、はじめに

仏教の起源は、インドの釈尊が紀元前五世紀頃に悟りを得て、伝道布教をしたことに起端している。その後、クシナガラので涅槃をし、弟子達の手により教えと戒律・教団が維持していった。紀元三世紀頃よりサンスクリット仏典から漢訳がなされ、法華経漢訳でも有名な鳩摩羅什などの高僧が現れ、中国の仏教は劇的な発展を迎えることとなる。日本への仏教伝来は、『日本書紀』によると、少し後世の飛鳥時代、五五二年に百済の聖王により釈迦仏の金銅像が献上した時とされている。奈良時代に鑑真和尚による布教、そして平安時代入り最澄、空海を遣唐使と共に中国に送り出して、日本仏教の礎を築くこととなる。その後、鎌倉時代に入り、栄西（臨済宗）、法然（浄土宗）、親鸞（浄土真宗）、道元（曹洞宗）、日蓮（日蓮宗）などの高僧が活躍をし、様々な宗派が誕生した。

さて、日本から世界に向けた仏教の海外布教は、本宗では鎌倉時代中期（一二九五年）に樺太への海外布教に出発した日持上人が有名であるが、組織的に展開した海外布教の基盤は浄土真宗が一九〇六年に上海別院を開院したことが起端である。（この時代には、京都大本山本圀寺も上海別院を一九二二年に旭日苗師により開設している）

その後、第二次世界大戦開戦により、海外移民に追隨する形で展開したハワイやアメリカ西海岸への日系移民を対象とした布教と、上海や台湾、朝鮮などのアジア地域の現地人やそこに在住する日本人を対象にした布教との二分化した布教がなされることとなる。そこには、海外で現地の方々からの迫害による苦しい生活を強いられる中で、仏教を求め、慣れ親しんだ日本の仏教を必要としたためである。僧侶達も現地の声に応えるべく、海を渡って苦楽を共にし、布教活動を行い教線拡張していった苦しい歴史も伺える。

そこで、当論文に於ける調査を「日本仏教各宗派による海外事情を探る その一」として、天台宗・浄土宗・曹洞宗の三宗派に着目をし「日本仏教各宗派の海外布教への展開の歴史」を開教区毎に歴史を振り返り、「日本仏教各宗派の開教区の寺院数」をグラフにし、各宗派が教線拡張のために苦境の中、歩んできた軌跡を知ることが目的とする。最終的には、その二、その三でその他の宗派も、参考文献があるものに関しては、調査を続けていきたい。その後、「日本仏教各宗派の開教区の寺院数」をデータ化し、各宗派の寺院数を開教区毎にミックスし比較していきたいと考えている。その結果が、歴史を知ることによってノウハウを学ぶと共に、日蓮宗の海外布教の未来への道筋になればとも考えている所である。

二、天台宗による海外布教

二―一 天台宗によるハワイ布教

一九一八年四月十五日よりハワイ ホノルルの南ホテル通りに天台宗 不動尊寺が有った場所を、一九三〇年九月二十九日 開教布教センターとして正式に制定し、一九三三年八月十日に当時の天台宗座主 梅谷孝永師によりハワイ別院と制定し誕生した。

しかしながら、念願の天台宗の寺院がハワイに誕生したにも関わらず六年後、第二次世界大戦が開戦し、お寺は倒

壊してしまった。第二次世界大戦が終戦したにも関わらず、一九五〇年に維持することが困難となり、お寺を閉じざるを得なくなった。その後、二十年の時が経ち、一九七二年に海外開教協会が設立し、一九七三年五月 ハワイ在住の多くの信徒や僧侶によって、ようやくハワイ天台宗別院が再設立した。十一月十五日には日本より僧侶、信徒併せて三五〇人も多くの参拝団を引き連れ、当時の天台宗座主 菅原栄海師のご親教により開堂供養会を勤修した。そして、薬師如来 荒了寛師を最初の開教区総長に任命した。（荒了寛師は、ハワイ美術院、ハワイ学院日本語学校を設立し、日本の文化を紹介普及に努めながら、現開教総長の任に就いている）

信徒の数に関しては、第二次世界大戦以前にも布教活動を行ってきたが、二十年の時が経った故に、事実上ゼロからのスタートと言わざるを得ない状況であった。付け加え、天台宗は、日本の古い宗教であるので、布教という面においては、言葉の違いや文化の違いからも当時は難しかった様子が伺える。

しかしながら、薬師如来法要や不動明王法要、阿弥陀佛法要などの法要を地道に活動し、周囲にアピールをして、文化活動などを続けていく内に信徒も次第が増えていき定着していった。

一九七五年、一隅を照らす運動（信仰と実践によって一人ひとりが心豊かな人間になり、平和で明るい世の中を共に築いていこうという社会啓発運動）もハワイでもスタートさせた。

それと共に、青蓮院門跡 東伏見慈治師しごうを招き、一隅協会いごくけいをハワイにも設立した。この教会の発足が、ハワイの日系人リーダー達で構成している日系アメリカ人コミュニティもこの協会に賛同する結果を生み、慈悲運動じいしうんどうや、ハワイ移民歴史研究協会いせいしけんきゅうけいとした活動を通して教線を拡張していった。一九七八年には、天台文化教室を開設、教室は、ハワイ美術院まで発展し、日本画・日本の染め物・書道をアメリカ人に教える組織まで発展していった。近年のハワイ在住の様々な芸術家に多大な影響を与える礎と成った事は言うまでもない。一九八二年、ワイキキ カパフル日本語学校の管理も天台宗に任し、子供たちの日本文化センターとして、剣道・柔道などの日本武道、日本語を

教える事を目的とした天台宗による学校が開設した。

正しく、ハワイに於ける天台宗の歴史は、宗教的活動、文化的な活動を通して、第二次世界大戦の戦禍を生き抜き信徒、僧侶、僧俗一体となり法灯を継承している。

ハワイには、その他にパロロ谷に一九三五年に松本晃観師がハワイ島より移転し設立したパロロ観音寺がある。このお寺は、第二次世界大戦の数々の困難を乗り越えて、今年八十周年を迎えられた。もう一ヶ寺は、マノア溪谷に一九七六年八月にローズ慈久師という尼僧が設立した高岩寺が存在している。

二―二 天台宗による北米布教

天台宗の北米における海外布教は、近年に入りどの宗派でも言えることであるが、日系移民の人々を対象とした日系人による仏教から、完全にキリスト教の文化基盤にある現地人を対象にした仏教にスイッチチェンジして行かなければならない時代になってきたことに起端している。この問題に対して、天台宗海外伝道事業団が、二〇〇〇年、現在地に間真・ネーモン師を支援するために借地であった境内地三万九〇〇〇坪を取得し、ニューヨーク別院として天台宗と正式に包括関係を結び正式な海外寺院として制定した。

住職を担当しているネーモン師は、米国にて二十年の長きに亘り、禅を研究、一九八九年より医学、生物学、人類学研究のため来日した。研究のかたわら、仏教の勉強を続け、大正大学の一島正真師を師僧に得度している。一九九四年にニューヨークに戻り、ダルマセンターを設立され、布教活動を開始した。二〇〇一年には比叡山行院（天台宗僧侶を育てる期間）にて四度加行（密教を中心とした修行）を成満している。現在サイモンズ・ロック大学にて仏教及び日本文化を講義するなど、地域社会へも貢献している。

二〇〇五年六月 天台宗ニューヨーク別院で当時の三千院門跡門主による本堂落慶法要が勤修した。開院以来、僧

俗とともに活発な活動が成し、その教線は、ヨーロッパにまで及んでいる。二〇一五年六月には十周年記念法要・記念式典が同地で行った。

二一三 天台宗によるインド布教

天台宗のインドへの布教は、サンガラトナ・法天・マナケ師が、禅定林というお寺を一九八五年にインドのナグプールに設立したことに始まる。マナケ師は、インドのナグプールという都市に住む熱心な仏教徒の家庭の一人っ子として生まれた。ナグプールという土地は、インド社会における人種問題であるカースト制度に反対したアン・ベドカル博士（独立インドの初代法務大臣）が指導者となり、一九五六年に「仏教改宗運動」が行われた都市であり、この時には六十万もの人々が仏教徒となったこともマナケ師の僧侶への道の要因と考えられる。そして一九七二年、大乘仏教の僧侶となるといふ夢を抱き、マナケ師は九歳のときに、単身で来日した。比叡山で出家をして、勉強に励むとともに百日回峯行などの修行を始め、十三年後の一九八五年に二十三歳で帰国した。インド帰国後は、仏教道場「天台宗 禅定林」を拠点に活動を始められた。また、パンニヤ（智慧）・メッタ（慈悲）・サンガ（僧）を設立（一九八二年にインド政府より認定した宗教社会法人）し、ナグプールという土地を中心に、宗教・福祉・教育・医療・生活の支援活動を行っている。また、貧しい子どもたちに生活の安定と仏教的情操教育を与えるため、「パンニヤ・メッタ子どもの家」という孤児院、「一隅幼稚園」という幼稚園を建設するなど、将来のインド社会に貢献できる人材の育成活動をしている。禅定林の付近にて、「薬師如来移動病院」も設立し、現地医療チームと提携し、巡回医療活動も行っている。

現在、マナケ師は福祉活動だけではなく、仏教徒による「インド縦断平和大行進」実施の指導者として参画し、カースト制度による人種差別撤廃を訴えかけている。

三、浄土宗による海外布教

三―一 浄土宗によるハワイ布教

浄土宗によるハワイ布教は、一八九六年に山口県大島郡にある西蓮寺住職の岡部学応師が最初に赴任し、大島郡出身の信徒が中心となり協力者が集り「ハマクア仏教開堂（後に浄土院と改名）」を開基し、ハワイ州で最初の日本仏教寺院が創設したことに始まる。また、一八九三年に「布哇宣教会（海外布教への後援会）」が発足し、浄土宗の有志が本格的にハワイ布教へ向けて寄付を呼びかけ、一八九七年までに四一六円六厘（現在で言うところの八百万円ほど）を集められ、組織的にハワイ開教を実施出来る体制をどの宗派よりも最初に整えられた。そして、八年後の一九〇五年、ホノルルのサウス通りに仮布教所を開設し、これを引き継いだ第二代総監 伊藤園定師が一九〇七年に、ハワイ浄土宗開教院（別院の前身）を設立した。ハワイ開教区の中枢機関である別院は、現在、法務の他にも茶道・書道教室・華道などの文化活動、病院慰問、サンデースクール、婦人会、吉水講などの教化活動も行なっている。現在、オアフ島に二ヶ寺、マウイ島に十二ヶ寺、カウアイ島に二ヶ寺、合計十六ヶ寺と大きな開教区と成っている。

三―二 浄土宗による北米布教

一九三六年より浄土宗による北米布教は、浄土宗の信徒の家を出張所として、毎月第二土曜日の午後八時より定例布教を行い開始した。信徒の自宅を拠点にしつつ布教活動をすると同時に、本格的な浄土宗教会堂の開設準備も土地の検討を議題に挙げつつ進められた。同年十一月には、浄土宗僧侶である岩崎秀孝師、青柳舜あおやぎしゅんりゅう隆師を含む信徒六名を集めて浄土宗教会所開設の第一回集会を行った。その結果、主任開教使には野崎師が、駐在開教使には青柳師が就任することとなった。十二月に行われた第二回集会では、北米浄土宗教会として、日本人街に四十ドルの家賃で場所

を借りることとなり、活動事業としては婦人会、青年会、日本語学校、日曜礼拝などを予定した。

一九三七年二月、入仏開眼供養会を行い、五月には北米浄土宗教会と共に、北米浄土宗開教本部の機能も追加することとなった。そして、一九三八年三月に亜米利加開教区と改称したが、開堂から四年後の一九四一年、日米の開戦で野崎師は抑留し、開教活動は中断せざるを得なくなった。

一九四五年、野崎師はロサンゼルスに帰還するも、新たに教会所の設置から始めなければならなく、文字通りゼロからのスタートとなった。そこで、二年後の一九四七年九月、リトル東京区にあった広島県人会の会堂を借り、仮教会所を設けることとなった。一九四九年十二月、ロサンゼルス市西街二〇〇三（通称西南地区）の元メソジスト教会の建物（約百二十坪で収容人数は六百名ととても大きな場所）を購入し移転した。一九五〇年三月二十六日に開堂式と仮入仏式が勤修し、入仏式を十月に、増上寺法主を迎え盛大に行われた。その後、檀信徒共に、布教活動を地道に行い、信徒も次第が増えていき、一九七二年十月、浄土宗 北米寺院創立 三十五周年・浄土宗開教八百年記念慶讃法要を、当時の知恩院住職である岸信宏師を迎え行われた。

一九七九年三月に、ハワイ開教使であった河合了勝師を第二代 北米浄土宗開教区開教総監に任命し、翌月に赴任した。河合師は野崎師の後を継いで布教に努めたが、教会所移転の問題に直面することとなる。移転の理由としては、開堂当時のジェファーンソン街は、日本人街であったが、アメリカ社会に定着した日系人が、郊外に拡散し、その代わりに、その土地にはメキシコの移民などの人々が移り住むようになり、治安も安定しなかったのが、移転の理由に挙げられる。そのためリトル東京の一角の再開発地域に移転・新築が計画され、浄土宗が現地宗教法人を獲得し、一九九二年に移転新築の事業を完遂した。同建物には、浄土宗北米開教本院・浄土宗北米開教区教務所・仏教大学ロサンゼルス校がある。

三―三 浄土宗による南米布教

浄土宗に於ける南米ブラジルへの開教は、南米各地に移民した数多くの日本人の要請に応え特命開教使の長谷川良信師によって行われた。長谷川師は、ブラジルの国と日系社会の実状を把握する為に徒歩で約八ヶ月を掛けて、全二十三州をも踏破している。約二千人近くの人々と知り合い、一九五四年十一月にブラジル政府の正式な許可を得て「南米浄土宗教団」が設立し、開教本部をサンパウロ市内に設けられた。その後、バスケ・ダ・サウデ区に移転し、開教活動が進められ、駐在開教使として関弘俊師が赴任したことで、長谷川師は一九五五年三月に一旦帰国した。しかし、関開教使が同年九月に退任し、南米開教は一旦中断せざるを得ない状況となった。

その二年後の一九五七年四月に、長谷川師は再び、二代開教総監 佐々木陽明師、他二名の僧侶を伴ってブラジルに向かい、第二次南米開教をスタートした。同年七月、サンパウロ市内に敷地を購入して、南米浄土宗別院日伯寺建設をスタートさせ、同時に日伯寺学園という学校も設立した。日伯寺学園には日本語学校も設けられ、同年十一月に開校した。翌年九月には、周囲の要請もあり、知的障害者治療教育部・養護教育部を発足し、十三名の知的障害児と親のない子供を養護することから始まった。同月にサンパウロ市に第一分院を開設した。(南米開教の基礎づくりを終えた一九五八年十月に、佐々木陽明に開教総監・学園の代理を命じて長谷川師は帰国している)

一九五九年三月、日伯寺学園内の知的障害児治療教育部・養護教育部は、信徒の井口吉三郎氏よりサンパウロ州イタケラ区の土地と建物二棟を寄贈して移転し、「子供の園(全寮制知的障害者施設)」と命名して新たな出発を遂げた。そして、長谷川師の命により、初代園長、第二期開教総監に、佐々木陽明師が就任した。佐々木師は、一九七三年九月に現在の別院本堂を新築し、落成式をあげ、社会への福祉事業を展開させるとともに、マリंगाやイビウーナに教線を伸ばしていくこととなる。その結果、一九七四年にパラナ州にマリंगा日伯寺を設立し、九年後の一九八三年に開教三十周年記念事業として、本堂も落慶している。一九八七年には教化・福祉活動の研修道場である「日伯寺

研修センター」建設を計画し、一九九三年 開教四十周年記念事業として正式に設立した。二〇〇三年イビウーナにイビウーナ日伯寺を五十周年記念行事として設立している。南米の浄土宗別院日伯寺、マリంగాにある日伯寺は、日本人と日系ブラジル人を主に対象として教化活動を行っているのに対して、イビウーナにある日伯寺の目的は、日系人を始め、ブラジル語による開教で、ブラジル人へも仏教、念仏の布教、生涯教育、福祉活動の場とすることを目的としている。

四、曹洞宗による海外布教

曹洞宗による海外布教の歴史は、一九〇三年よりペルー、ハワイに始まり、現在ではサンフランシスコに曹洞宗国際センターを置き、ハワイ、北アメリカ、南アメリカ、ヨーロッパに国際布教総監部を制定し、百五名の国際布教師が教えを仰ぎ、曹洞禅のさらなる教線拡張に努められている。

国際布教総監部では、それぞれの管轄する地域内における宗務の総括をしている。ハワイにある国際布教総監部は、ホノルル市内に、北米国際総監部は、ロサンゼルス市内に、南米国際布教総監部は、ブラジルのサンパウロ市内に制定し、欧州国際布教総監部は、フランス・パリ市内にそれぞれ総監部を制定して現地僧侶と共に様々な布教活動を展開している。国際布教師の任命は、官長任命で一一七名の僧侶が海外で活躍をしている。現在、外国籍僧侶の為に、日本で英語を共通言語とした曹洞宗立専門僧堂（かいたん）を開単し、三ヶ月の修行を積み、曹洞宗の僧侶として巣立って行っている。

四―一 曹洞宗によるハワイ布教

曹洞宗のハワイへの布教は、日系移民の歴史と密接に関わっている。ハワイにおける日系人の苦境な生活は、どの

宗派でも言えることであるが、所報四十七号「アメリカ仏教史から見る世界開教のあり方」でも触れているように、日本人が移民して約四十年後、一九四一年十二月七日に真珠湾攻撃（真珠湾攻撃Ⅱ休日である日曜日を狙ってハワイオアフ島真珠湾にあったアメリカ海軍の太平洋艦隊と基地に対して、日本海軍が行った航空攻撃および潜航艇による攻撃）が行われたことに始まる。

その翌日、アメリカ政府は、日本に対して宣戦布告し、日本人移民に疑惑を持ち始め、アメリカ国民から日系人に注がれる視線にはあからさまな憎悪が芽生え始めた。その結果、ハワイのアメリカ国民を大量殺戮した日本軍への恐怖と憎しみが、そのまま米日系人へと向けられることとなった。アメリカに於ける日系人は、過酷を強いられる環境で生活していく中、仏教を精神的な拠りどころとして、寺院と信徒が一体となり、共に支え合いながら今日まで至っている。

曹洞宗は、一九〇三年、砂糖耕地で働く日系一世を援助するために、本山の命として、河原仙英師、菅良雲師が派遣した。河原師はオアフ島より、菅師はカウアイ島を中心に布教活動を始められた。そして両師ともに一九〇三年に寺院を創立した。これが契機となり、曹洞宗のハワイでの開教が始まっていくこととなる。

一九一三年 ホノルルのホール通りに「曹洞宗両本山仮別院」を設立し、一九二一年に正式に「ハワイ別院」として認証し、一九三二年 付属の日本語学校として和敬学園を創設した。

一九三四年に、ヌアヌ通りに二エーカーの敷地を購入し、別院新本堂建立の準備を始めたが、一九四一年十二月七日の第二次世界大戦により、布教活動は全て中止した。一九五二年、釈迦の生誕地であるインドのブツダガヤの大塔を模した塔を中央に配し、洋式の寺院内装と設備を完備した現在の寺院が完成した。

現在、オアフ島四カ寺、ハワイ島二カ寺、マウイ島、モロカイ島、カウアイ島にそれぞれ一カ寺、九カ寺の寺院をもつて布教活動を行っている。

四―二 曹洞宗による北米布教

曹洞宗による北米布教は、一九二二年に磯部峰仙師の手によって布教が始まった。当時の布教は、信徒の自宅の二階の小さな一室を仮本堂に変えて始められた。やがて、信徒が増えていき、一九二六年移民が土地を取得することが困難な時代に、今の土地を所有し移転落慶をして、日系アメリカ人社会の発展に貢献している。当時の仏教の印象は、異文化の中で暮らす日系移民の心の支えであったようである。葬儀、法要などの仏事はもちろんのこと、他にも日本の伝統文化の継承の場として活用し、また娯楽や憩いの場として、様々なニーズや場面に応じて寺院としての機能をフル活用し、今日までその法灯を保っている。現在の北米総監部は、百十一カ所にも及ぶ日系寺院・禅センターと呼ばれる外国人僧侶の手により運営する寺院、そして三五〇名以上もの僧侶をもつて布教活動を行っている。殊更に「ZEN」という言葉は、北米では一般的な商品やレストランなどの名前にまで使われるようになり、キリスト教徒と比べると数はまだマイナーであるが、伸び率だけを見れば群を抜いている。このまま行けば、十数年後には、寺院数、信徒の数の数の上でも全米で第二位の宗教にもなりつつある。

四―三 曹洞宗による南米布教

曹洞宗に於ける南米布教は、南アメリカ大陸とパナマ共和国より南部の南米諸国となっているが、曹洞宗の南米における初めての布教地になったのは、ペルー共和国である。一九〇三年、兵庫県出身の上野泰庵師が管長命によりペルーにて布教活動を開始した。その理由には、殆どの日本人は南米へ渡る際にこの地に入植していたことがあげられる。一九〇七年にサンタバルバラに南米最古のお寺と成る南漸寺を建立した。翌年、両大本山（永平寺、總持寺）貫首によって慈恩寺と改名する。一九二五年にサン・ルイスへ移転、一九七四年に地震で倒壊、一九七七年に現在の地に移転した。二〇〇四年には南米開教百周年記念行事が開催した。

曹洞宗のブラジルにおける布教は、一九五二年、移民していた信者より、曹洞宗への正式な開教を願う要望書の提出により、時の管長であった高階瓏仙禪師がブラジルに渡る決意をし、一九五五年にブラジル各地を巡業した。同年モジダスクルーゼス市に禪源寺を建立、一九五六年に新宮良範初代総監が着任し、一九五九年、サンパウロ市に佛心寺が建立（一九六五年現在地に移転）、同時に総監部が設置した。

四―四 曹洞宗によるヨーロッパ布教

曹洞宗に於ける欧州布教は、一九六七年に弟子丸泰仙師が渡欧したことに始まり、フランスを起点に坐禪中心の布教活動がヨーロッパ各国で行われた。一九七〇年にヨーロッパで曹洞宗最初のお寺である仏国禪寺を建立し、一九七五年、スイス・チューリッヒに無畏城寺を建立した。一九七六年には、パリ市内にある佛国禪寺に「曹洞宗ヨーロッパ開教総監部」が開設するとともに、弟子丸師が初代開教総監（現国際布教総監）に就任した。一九七九年、ヨーロッパで禪の普及の為に、「禪道尼苑（禪センター）」を開設した。十九世紀に作られたお城と周囲の建物を基盤に改築し四百名の弟子丸師の弟子と共に大きな道場が建立した。（二〇〇七年に曹洞宗立専門僧堂を三月月、禪道尼苑にて開単し、沢山の外国人教師を育てた）

一九八二年、弟子丸師の遷化後、総監部の機能は一時的に停止したが、二〇〇一年六月には「ヨーロッパ国際布教総監部」が再設し、今に至っている。一九八四年、イタリア布教開始、一九八九年、ドイツ開教開始した。現在は、ドイツ、ノルウェー、オランダへも教線は広がっている。

四―五 曹洞宗によるその他の海外布教

曹洞宗によるその他の地域の海外布教は、オーストラリアに二ヶ寺、シンガポールに一ヶ寺、スリランカに一ヶ寺

の寺院が存在している。オーストラリアの寺院は、バイロンベイに道中庵（山端法玄師が一九九八年に開堂）というお寺、メルボルンに直証庵（一九九八年に是松慧海師が開堂）というお寺が一ヶ寺ある。そのほかに、禅センター、コミュニティセンターは四十二ヶ所存在している。

また、シンガポールでは、明治時代から昭和初期に掛けて日本からシンガポールに渡った「からゆきさん」と呼ばれる農村、漁村などの貧しい家の女性を祀るために一八八九年に日本人共同墓地を建てたところから始まる。後に、一八九三年に曹洞宗の釈種樸仙師（しゃくしゅくせんし）がシンガポールに渡り草庵を結び、托鉢により浄財を集められて、一九一一年に墓地の北側の一角に西有寺を建立した。しかしながら、第二次世界大戦、日本敗戦により土地はイギリス所有地となり、寺院は老廃する。一九六九年、日本人会の訴えかけにより、返還するも、シンガポールは埋葬禁止令により、墓地には埋葬が出来なくなっていた。一九八五年に日本人墓地に埋葬している方々に対して、供養する為に、曹洞宗により日本寺としてお堂が再建した。現在は、日本人会が日本寺と改名し運営しており、毎年六月四日に開山忌、施餓鬼法要が、神奈川県西有寺及び関連寺院により勤修している。

スリランカの永雲寺は、静岡県にある洞慶院というお寺の住職 丹波廉芳師（にわねんぼう）（第七十七世永平寺前管長）が管長時代にスリランカに数回訪れており、スリランカで日本の仏教が広まるか不安の中、スリランカ人を日本に呼び日本の大学を卒業させて、一九八九年一月に丹波師がお寺を寄進し、ヴィジッタ瑞雲師を住職として認証し、タイのお寺を永雲寺と定め、スリランカで初めての禅寺を開堂した。

五、まとめ

「その一」で海外布教の歴史を、天台宗、浄土宗、曹洞宗と三宗に焦点を置き、各宗派が布教を展開している開教区毎に歴史と共に寺院の数を調査した。所報四十七号「アメリカ仏教史から見る世界開教のあり方」でも触れている

ように、海外への布教のニーズはどの宗派も二分化していることが伺える。

第一には、日本から北米、ハワイ、南米へ渡った日本人に対する心の依りどころを求めるニーズに答える為である。また、近年に移ってからはキリスト教には無い仏さまや神さまに近い所に行ける、または同じ境地に至れるという教への慈悲深さに感銘を受け、仏教の教えを学びたいという現地人のニーズに応える教化活動が近年では増えつつあり、日系人からパラダイムチェンジすべき時代を迎えつつあるように伺える。現に、彼らは、仏教を「信じる宗教」(religion of faith)ではなく、「目覚める宗教」(religion of awakening)と捉えている。ケネス田中氏は、著書の『アメリカ仏教』の中で、「キリスト教から仏教へ改宗した人たちに尋ねると、キリストの復活を「信じる」ことより、煩惱による誤った見方を是正して自らが「目覚める」ことを究極の目的にする仏教の考えの方が魅力的だと答える人が実に多い。キリスト教などには、立派な教義があるが、その教えを体験する方法が明確ではないのに対し、仏教は誰もが日々実践できる瞑想などを通して実際に教えを体験できることに惹かれる」と語られている。

当研究では「その一」として三つの宗派を取り扱ったが、どの宗派も日系人と苦楽を共にして壮絶な布教の歴史を有している。また、本宗もそうであるように、既に本格的に現地人への開教をスタートさせている宗派も多いように伺える。アップル社の共同設立者の一人であるステイブ・ジョブス氏も魅了した曹洞宗は、「ZEN」というメデイテーション(瞑想)を前面に打ち出し、外国人にも魅力的な修行体験を積極的に布教しており、教線の広がりや群を抜いている。「その二」で浄土真宗や臨済宗、真言宗を調査する予定であるが、真宗は「真宗十派」と言われるように、十の派に分かれるのだが、殊更に「Honpa Hongwanji (本願寺派)」は、北米に八十二ヶ寺、ハワイに三十六ヶ寺、南米に三十五ヶ寺、その他にオーストラリア、メキシコ、台湾、香港、ネパール、ベルギー、フランス、シンガポールに一ヶ寺ずつ存在し、布教活動を続けている。日本には、十三宗派五十六派あり、全ての宗派が海外布教をしているわけではないのだが、参考文献があれば、その他の宗派の海外布教の現状を引き続き調査してみる価値が十

分あると考えられる。また、新興宗教に代表される「SGI」、ハワイで毎年開催している灯籠流しで有名な「真如苑」などの新興宗教も布教のノウハウから鑑みても、引き続き調査研究してみる価値もある。さらに海外には、キリスト教やイスラム教の海外既成宗教団体も、日本へ布教している点から言っても、海外布教のノウハウを知る上で欠かせない宗教である。

日蓮聖人は、「立正安国論」の中で、次のように示されている。

「汝早く信仰の寸心を改めて速やかに実乗の一善に帰せよ。然れば則ち三界は皆仏国なり」（定四三二）
昨年度、トルコで行われたG20首脳会議でも議題が上がったように、シリア内戦・難民・テロ、IS問題という、未だかつて無い宗教戦争が勃発している。少しでも早い一天四海皆妙法、ご生誕八百年に向け、宗門として宗派を問わず、更に世界平和へ向け邁進する必要があるのではなからうか。

【参考文献】

『アメリカ 仏教の夢』 荒了寛著

『生前のハワイにおける日系仏教教団の諸相』 守屋友江著

『インド仏教の変容』 サンガラトナ法天マナケ著

『アメリカ仏教』 ケネス田中著

『ハワイ日蓮宗八十年のあゆみ』 ハワイ日蓮宗別院、昭和五十七年

『日蓮宗ハワイ開教百年史』 ハワイ開教区、平成十五年

『昭和定本 日蓮聖人遺文』

天台宗英語サイト <http://www.tendai.or.jp/english/index.php>

浄土宗英語サイト <http://www.jodo.or.jp/index.html>

曹洞宗英語サイト <http://global.sotozen-net.or.jp/eng/>